

江戸時代における子どもの発達観と育児方法について

柴崎正行

Developmental Conception and Methods of Care and Education for Children
in the Edo period.

Masayuki SHIBASAKI

はじめに

子育てに自信がなかったり悩んだりする親が増えているといわれるが、では私たち日本人は子どもをどのように育ててきたのであろうか。わが国における子育ての歴史を検討することにより、これまで子育てにはどのような知識と経験が重要であったのか、またそうした知識や経験が時代や世代を越えてどのように伝えられてきたのかを明らかにしたい。本論では江戸時代に焦点を当てて、その子育ての歴史の一端を検討する。

それぞれの時代における子育ての方法には、その時代の人々が無意識的に持っている子育てに対する通念、現代的に表現すると子どもの発達観ともいうべきものが存在している。そこで本論では江戸期における子育てに関する方法とその背景にある子どもの発達観を、江戸時代に関する民族学的資料や子育て書を中心に検討して明らかにしていく。

1. 江戸時代の人々は子どもの発達をどう見ていたか

(1) 生育儀礼からの検討

江戸時代における生育儀礼については、全国規模の民族学的調査である『諸国風俗問状答』¹⁾、『真澄遊覧記』²⁾、『全国民事慣例集』³⁾、『日本産育習俗資料集成』⁴⁾などの資料がある。また、これらの文献をまとめた直江廣治『農民の子』（『日本子ども史』第3巻）⁵⁾や大藤ゆき『子どもの民族学』⁶⁾、『児やらい』鎌田久子⁷⁾等の『日本人の子産み・子育て』などもある。これらを主な資料として、江戸時代に行われていた生育儀礼を整理すると次のようなものがあることがわかった。

①妊娠5カ月前後には「帯祝い」といって帯を巻く儀礼が行われた。これは現在でも行われているが、江戸時代には帯祝いは腹帯を巻くだけでなく、共食をともなっている。共食は、近親者を招いて祝いの膳につき、さらに近所には赤飯や餅を配って披露している。帯祝いをするという事は、家としてその子を生み育てる決意を表示したのもであった。

②生後7日には名付けと言って子どもの名前がつけられた。これによって家族の一員として位置づけられた。さらに、産髪剃りを行うが、これは髪の一部を残しておいて、この髪によって何か危険なことがあったら産神が子ども残された神をひっぱりあげて助けてくれるという意味があったという。

③生後30日前後には、宮参りをし初めて氏神に子どもを引き合わせた。これは、産の忌みが開けたことを示す儀礼であるが、子どもが初めて村の一員として生きていくことを神にも周りの人達にも承認してもらうための儀礼である。

④生後100日前後には、食い初めと言って初めて食べ物子どもに与えられた。生後1年目は、ブツケ餅、ブツサリ餅といって、餅を背負わせたりぶつかけたりして、1年たたないで早く歩けるようになった子どもはわざと倒して、早く歩けることを避けようとした。

⑤生後3年、5年、7年目にも子どもの成長を祝い、髪型を大人に近づけ着物をさせる儀式を行っていた。特に7歳の祝いは、氏神の名簿に初めて名前が記されるという重要な儀礼であり、子どもからぬげだし、大人へと一歩踏み込む境として認識されていた。

このように江戸時代において、乳幼児期には非常に多くの生育儀礼が行われていた。とりわけ、生後1年の間は、儀礼が頻繁に執り行われている。これは、乳幼児が死亡しやすかったという当時の実情から、子どもの無事を神に祈るということと、子どもの成長を心から祝うという意味がこめられていたと思われる。

(2) 諺からの検討

わが国には「七つ前は神の子」、「七つ前は神のうち」というような、伝統的な子どもの見方を示した諺がある。また「7歳未満忌服なし」という諺もこれと同じ見方を示したものといえよう。宮田⁸⁾によれば、これらの見方は、まだ7歳にならない者は喪の忌みには関係がないことを示しているという。そして柳田国男は六つ以下の子どもが死んだ場合には、家の床下などに埋めて特別な埋葬地がないことにも注目していたという。これは子墓とも呼ばれており、死んだ子どもの体内に宿っていた靈魂が蘇生しやすいためと考えられているという。

これらのことから「7つ前は神の子」という諺の意味は、子どもはまだ俗世に汚れていないからということではなく、子どもの魂はまだ自由に動ける神の領域にあるということなのである。大藤ゆきは、『子どもの民族学』の中で、「幼児を神の子に見立てて、祭礼のときに稚児役としたり、祭の主役としたり、正月に幸福をもたらす訪問者としてしたりした」「七つまでの子はまだ人間界でなく、神の管轄下にあるという意味であるが、いいかえればこの頃までの幼児の魂はきわめて不安定だという意味でもある」⁶⁾と柳田の解釈を受け継いでいる。

現在でも、大人ならば許されないようなことでも7歳以下の子どもには「七つまでは神のうち」「七つまでは神様」と言って仕方がないから許すという風潮がある。柳田を初めとする民

族学的解釈では、子どもの性質としてより神に近い存在であることを示しているのだが、これは乳幼児が死亡しやすいことを示してもいとも解釈できよう。また発達という視点からみると、大人と7歳以下の乳幼児とは本質的に違う存在であることを認識していたともいえる。そして、子どもは発達の大人とは違った存在だからこそ、大目に見たり許してあげようという暖かな見方が存在したともいえよう。

(3) 子どもの発達の見方

こうした生育儀礼や諺の意味を、発達という視点から捉えるとどのように検討できるであろうか。こうした儀礼を行うことによって、大人は子どもの発達というものを意識的に確認していたことがわかる。そして、この生育儀礼が子どもの発達を見る目安となっていたことが推察される。現在でいえば、育児書にかかれる発達段階説と同じような役割を担っていたといえるだろう。また、生育儀礼のこうした内容とその行われる期日は、現在の子どもの発達の捉え方とほぼ一致していることもわかる。

非常に大まかではあるが、生後100日前後で食べ初めをするのも少し早い離乳を意識したことであるし、生後1年ではブツツケ餅、ブッサリ餅という歩くことに関する儀礼が行われているが、これは1歳前後で歩けるようになることを意識させる儀礼でもあるといえる。

さらに生後3年、7年を成長の大きな大きなヤマと考えているのは、現在では幼稚園に入学する年齢の3歳、小学校へ就学する7歳と全く同じである。これらは3歳という年齢が家庭を離れて、近隣の子どもたちとの生活が中心になる時期であることや、7歳という年齢が遊び中心の生活であった幼児期から、寺子屋における集団的な学習を中心にした児童期に移行する時期に当たっていることを意識させるという、子どもたちの精神的な発達を意識させる見方であるともいえよう。

また、生後1年目の餅を子どもに背負わせたり、ぶつけたりする儀礼からは、子どもにどのように発達して欲しいかという気持ちがよみとれる。丈夫に育って欲しいという願いは、他の儀礼と同様である。しかし、この儀礼には、人より早く歩けることを嫌うという意味が込められており、特異ではなく人並みに発達して欲しいという願いがうかがえるのではないだろうか。江戸時代には、生育儀礼を通して、子どもの発達を意識し、確認するということが行われていた。その発達の捉え方は、非常におおまかではあるが、現在、我々が発達の捉えている子どもの発達像とほぼ一致しているといえる。また、子どもが発達していくことを喜んで祝ったり、丈夫に育つことを祈る気持ちが強いが、発達を急ぐことよりも順調に人並みに発達することの方を願っていたともいえる。また、7歳以下の乳幼児と大人の違いを発達的にもはっきりと区別しており、その発達観により子どもに暖かな見方をしていたと言える。

2. 子どもの育児の方法

次には、以上のような江戸時代の子どもに対する発達的に見方に基づいて、具体的にはどのような方法で育児をしていたのかについてみていくことにする。

(1) 乳幼児を誰が育てたか

まずは江戸時代においては、乳幼児期の子どもを育てる人は主に誰であったのか。また子どもは、周囲のどのような人とどのような関係をもって育っていったのかについてまとめてみることにする。

江戸時代においても乳児期の子どもは母親とは切り離せない存在であったようである。生まれて20日間程は、産屋という場所で母親と2人きりで過ごした。しかし、その後の子育ては、武家と農民や商人などの庶民とはかなり違っていたようである。

① 乳母による子育て

源氏物語りにおいて乳母による子育てがなされていた様子が描かれていることからわかるように、すでに平安時代の貴族においては乳母が主に子育てを担っていた。この育児方法は、じきに武家においても踏襲され、すでに源頼朝は乳母によって育てられていたという。

ではどのような人が乳母になり、その育児方針はどのようなものであったのだろうか。今野伸雄の「江戸子育て事情」によれば、⁹⁾「乳母の本質も、貴族社会では和魂による文学、音楽、遊芸等を指導したが、武士の家に仕える乳母は、まず武士としての心構えを養君に強いなければならない。そのためには、女ながらも尽忠の精神があるのみ。」と説明されている。実際に、三代将軍家光の乳母であった稲葉福は春日の局として名前が知られているが、その忠心ぶりは養君家光を将軍にまでしたことから有名である。

こうした乳母の雇用は、江戸時代の中期以降になると余裕のある商家などでもよく見られるようになったという。こうした商家などにおいて乳母がどのような役割を果たしていたかを、京都の呉服屋の出身者である中村楊齋の「比売鑑」によると、「子を生みて後は、乳母を選ぶ事を先とす。その心ばえ、広く寛げく、愛憐み、従いて、穏やかに安らかに恭しく、畏れありて謹み深く、言葉少なき者を求めよ。唐土の王公の御子にはかようの婦人を取りて母師となし、その徳を導くなり。次には慈母ありてその心に従い、また次に保母ありてその身を養えり。これを三母という。大夫の子には食母あり、また乳母とも名づく。養い教える事を兼ねたり。士庶民は、その妻手ずから子を育つものなれば、母の教えに与かる所、いと重し。およそ子の形・心ざま、父母に次ぎては乳母に似るものなり。」と述べられている。¹⁰⁾ ここからもわかるように、乳母は養うだけでなく教えることも担っていたので、その影響は実の父母に次いで大きいといわれている。そのために、どのような乳母に預けるかは大きな問題であった。この「比売鑑」では良き乳母として、寛容さや穏健さ、慎み深さなどをその条件としていることか

ら、儒教的に理想とする母親像をよき乳母像としていたと思われる。

だが、実際にはそうした乳母はなかなかいなかったようである。今野の「江戸子育て事情」には「乳母はもともと卑賤の者が多いから、自分の家では作法も行儀もなく、着るものも薄着で、普段は粗末なものばかり食べていたのが、乳母になると途端にその家の風習になじむように絹綿などの厚着をするから、お乳が熱っぽくなって赤ん坊に害をなす。――乳母に行儀・作法を強要してストレスになり、乳が出なくなったり、反対に気づまりだと乳が出ないだろうと、船頭や馬方のように勝手にさせておくと、大事な赤ん坊を放ったらかして怪我をさせたり、庇っかけたりすることが多く、その上赤ん坊も乳母同様わがままになるものである。」と述べられており⁹⁾、当時の乳母の実態がある程度はわかる。江戸の商家の乳母選びは、なかなか難しいものがあつたようである。

② 家庭における子育て

江戸時代において人口の大半を占めていた農民の子育てはどうであつたろうか。江戸時代の農民の子育ては、すでに述べたように非常にたくさんの人が擬制的な親として精神的な関わりをもった。それは子どもはその地域の人々によって見守られて育つという当時の慣習によるものでもあり、またまだまだ医療の発達していなかった当時においては、出産時やその後の子育ての時期に親も命を落とすことが多かったことの反映でもあろう。血族的な親が死んでも、精神的に結ばれた親が生きていれば何とか面倒を見てくれるという期待もあつたと思われる。またそれは擬制的な親になる場合の、お互いの暗黙の約束でもあつたろう。

こうしたわが子の成長を祝う意味と擬制的親子関係を期待することもあつて、さまざまな儀礼が行われた。出産のとき立ち会ってくれる穩婆、名前を付けてくれる名付け親、母乳が出ないときには乳を分けてくれる乳付け親、子守りの親など、多くの人たちと擬制的な親子関係を結ぶことにより農民の子どもは育てられていった。そしてこうした擬制的な親は、子どもの一生を通じて保護者的役割をその子どもに対してもち続けたのである。

また、子育てをするのは母親が中心であると述べたが、農村や商家では母親だけではなく、家族みんなで子育てをすることも多かつたようである。家が農作業や商売で忙しい場合には、子守りを雇う場合もあるし、子どもの姉、祖母、なども子育てを分担したのである。ここで共通しているのは、実際に手をかけて子育てに参加したのは、やはり女性であつたことである。母親、乳母、姉や祖母、子守りというようにいろいろな人々によって子育てが行われていたが、子育ては女性の仕事であるという社会的通念が存在していたことがわかる。

③ 子守による子育て

江戸時代には、子守をする人のいない家や、経済的に裕福な人が10歳前後の女の子を赤ん坊の子守役として雇うという習慣があつたという。大藤は、「とくに子を背負うのが一般化さ

れるようになったのは、江戸中期以後で十～十二・三歳くらいの女の子を子守りとしてやとって背負わせるようになってからではないかと思われる」⁶⁾と子守とおんぶの関係を考察している。

子守は、裕福な農家が近隣の貧しい農家の娘を雇って、小さい子の面倒を見させることが多かった。しかし飢饉のような場合には、東北地方から江戸の町に奉公として子どもたちが出される場合も多かった。特に貧しい農家では、口減らしをするために10歳頃になる娘を進んで江戸に子守として出したのである。

しかし、伊豆諸島の島々や沖縄の宮古群島では、このような有給の雇い人としての子守りではなく、子守りと子守りをされる子どもの深い関係をつくりあげてを目的とする子守りの慣行がある。子守りは、モイとかモリと呼ばれ、早いところでは妊娠中から10歳前後から12、3歳の女の子を子守として依頼する。利島では、モリが雇われると双方の家族とも、モリヤトイ祝い、モリヤトワレ祝いを行うという。また、モリが生児が3歳の7月7日まで子守りをするが、この日には生児の家でウブイアゲ祝い、モリモドシ祝いといって、モリの近親を招いてご馳走する。モリと子守りをされる生児は、擬制的に姉弟(妹)の関係になり、モリの母父とも擬制的に親子関係を結んでいる。実際、モリは生児の家で夕食をとったり、泊まることもあるという。利島や新島では、島全体がこのモリで結ばれている。こうした伊豆諸島で見られる子守りの慣行は、子どもに実の親、家族だけでなく、多くの保護者をもってその子どもの成長をより多くの人に保証してもらおうとしたと解釈されている。

(2) 乳幼児をどのように育てたか

① 胎児の育て方

現在でも胎教については多くの関心が払われているが、そうした胎児の育て方に対する関心はずで江戸時代においてもみられたようである。それは当時の女性の育児の教科書ともいべき往来書や訓育書を読むと胎児に関する記述がしばしばみられることからわかる

例えば元禄年間に草田寸木子によって編纂された「女重宝大成」には、胎児の発育の様子が詳細に紹介されている。¹⁰⁾ まだ産科科学が発達していなかった当時において、どのようにしてこうした発育を知り得たのかと驚くほどの内容である。その一部を紹介しておく、3ヶ月めには蚕の繭のような形になることや、6ヶ月めになると毛髪が生じ魚のように母親の腹の中を泳ぐこと、7ヶ月めには味覚や聴覚、嗅覚や視覚などが発達して人の形になることなど、実に詳しく胎児の様子を記述している。

またこうした書物には、胎児のためによくないと当時はいわれたこともたくさん述べられている。この中には妊娠中に蟹を食べると横産をすとか、きのご類を食べると生まれる子は脳膜炎にかかる、といった迷信も数多く含まれていた。しかし江戸時代においては、胎児の育て方に関する経験的な知識を書物によって伝えるという方法がすでに確立していたということが

できよう。その背景には、女性の多くがこうした文字の読み書きをできるようになっていたという事実がなければならぬだろう。そうした文化的な背景があつてはじめて、一般には見たこともない胎児という存在に対するかかわり方が伝わっていったといえる。

② 出産から乳児までの育て方

まず、生まれて20日前後は、産の忌みという観念から産屋で母親とともに過ごしている。この産屋とは母屋とは別の炊事場付きの間か二間の小さな小屋である。これは産の忌みによってつつしみ、こもっていると解釈されるが、子育ての環境という視点においては、20日間も母親と2人だけで小屋にこもるとするのは外部にさらされることのないので雑菌から守られている環境であつたと捉えることができる。感染に弱い生まれてまもない子どもにとっては適していた環境であつたとも考えられる。このことは、母親にとっても同じである。また、子どもは母親と2人でゆっくりと過ごせる環境であつたともいえる。

子どもは産屋を出ると、次には嬰兒かごの中に入れて育てられる。嬰兒かごには、子どもがはいはいするようになるまで入れておくことが多かった。どのように子どもがこのかごの中に入れられたかという点、秋田県では、まず、かごの底にはモミガラや木灰、稲桿、筵、草木灰、筵、海草という順に敷きつめ、その上に子どもの下半身をまくって座らせ脚の上におしめを当てて子どもをしっかりと布団でくるみ、子どもの前にはでんでん太鼓等おもちゃが置かれる。この時、子どもはそのまま大小便をするので、海草は1日2、3回、筵は2、3日に1回かえる。嬰兒かごに入れた子どもは親の働く畑の横の木陰に置かれたり、あるいは親は畑に出るが子どもはかごに入れられたまま家の中に置かれた。子どもを嬰兒かごに入れて育てるのは、仕事の手間を考えてのことであるとも解釈できるが、直江はかごを利用する前に丈夫に育った子や犬や猫を入れてから子どもを入れるとか、かごをよそから借りてくるときには小石を1つ入れてくるなどの習慣があることからもっと深い意味があるとしている。当時は、病気という状態を魂が抜け出たと考えていたので、生まれたばかりの乳児は大人よりも病気にかかりやすく、不安定な存在であるからかごの中に納めることによって魂が抜けにくいと考えたのではないかと解釈している⁵⁾。

乳児は1日中この嬰兒かごの中に入れていたので、1日中脚が固定されていて、自由に動けない環境である。また、嬰兒かごの中からは、授乳の時以外は出してもらえなかった。こうした環境は、子どもの脚や腰の発達、また母親への気持ち、現在の発達心理学流に言えばアタッチメントの形成に影響はないのだろうかとの疑問になるが、嬰兒かごが消えてしまった今となっては検討することができない。ただ、この嬰兒かごに入れて育てたからといって、歩けなくなるということとはなかった。当時の人々は、特別な働きかけをしなくても子どもというのは時期がくれば歩けるようになると考えていたのかもしれない。嬰兒かごに入れられた子は、布団でくるまれ暖かくされていた。また、嬰兒かごの上には、でんでん太鼓などおもちゃが与え

られていた。こうしたことから、子どもの健康について考えた環境づくりをしていたこと、またおもちゃを与えて単調でいることに子どもが飽きないような環境をつくりだしていることがわかる。

嬰兒かごに入れられた子は、そのまま家におかれることもあるが、大人の職場である田畑のそばへおかれることも多かった。これは、子どもが間近で大人の営みを観察できる環境にあったと言える。また、保護してくれる大人がすぐそばにいて、精神的にも安定できる環境をつくりだしていたと言える。

③ 乳児期から幼児期までの育て方

子どもが嬰兒かごから這い出るようになると、今度は大人の背中、あるいは子守り（子ども）の背中に負われるようになる。子どもは大人の背中の上で、大人の生活の営み、畑仕事や家の仕事などを眺めたり、ともに一緒にうごくという環境なのである。こうした環境は、しっかりと歩けるようになるまで、あるいは大人の目からはなれても安心していられるようになるまでつづけられたのであろう。

おぶうという習慣は、江戸時代にはすでに定着していたようである。日本人の伝統的子育てには、おぶうという習慣がある。いつ頃からおぶうようになったのかははっきりしていないが、大藤によると「おんぶは鎌倉・室町時代には既に行われていたらしく、袖の短いハンテンでおんぶしている絵がある」⁶⁾ という。直江は、『日本子どもの歴史』の中で、モースの観察を引用している。モースは明治10年頃の日本を非常によく観察しているのであるが、「小さい子どもたちは赤ん坊を背中に負って見物人として田の畔にいるらしく見える。子どもを背負うということは、いたるところで見られる。婦人が五人いれば四人まで、子どもが六人いれば五人まで、かならず背負っていることはまことに著しく目に付く」⁵⁾ と田植えの様子を記している。

おぶう人は、母親か子守と呼ばれる小さな子どもであったようである。畑仕事をするには、両手がかえるおんぶが最も適した方法であったのだろう。どのようにおぶうかについては、直江によると「『ねんねこ半纏』ですっぽり背中に負うのや座蒲団に紐をつけたような形の『亀の子』と呼ぶものがある。簡単なものだど兵児帯で背中にくくったり、背負い紐、またその地方なりに専用の帯のようなものも使われている」⁵⁾ ということである。また、おぶう人の着物の中にすっぽりと入れて素肌に背負う習慣もあったようである。これは、文政10年(1827)に刊行された「民家育草」に出ている絵から直江が引用しているのであるが、直江によるとこの方法の方が古風なおんぶであると考察している。江戸時代の浮世絵を見ても、ほとんどが素肌にじかに子どもを背負っている姿である。おぶう人は、モースの観察によると小さな子どもや婦人であったと記されている。婦人というのは、おそらく母親であろう。小さな子どもは、年長の姉、あるいは子守りであろう。

以上のように、江戸時代の子どもは2、3歳くらいまでの特におんぶの時期には、大人とべ

ったりであり、大人の生活を目の当たりにできる環境であったと言えよう。さらに、当時の生活の中でできるだけ子どもが健康で、精神的にも安定できるように環境をつくりだしていたと考えることができる。

(4) 幼児期の遊びと育児

江戸時代の幼児はどのような遊びをしていたのであろうか。江戸時代の子どもたちの遊びをまとめた書物として小野武雄編著の「江戸の遊戯風俗図誌」がある¹¹⁾。それによると江戸時代に用いられていた主な玩具としては次のようなものがあつたという。

- ① 正月や節句の玩具： 羽子板、手鞠、紙鳶（凧）、破魔弓、双六、かるた、など
- ② 季節の玩具： 風車、花火、切組灯籠、万度、など
- ③ 音の出る玩具： がらがら、豆太鼓、盆太鼓、獅子笛、鶯笛、雲雀笛など
- ④ 人形類： はだか人形、芥子人形、金平人形、土人形、姉さま、など
- ⑤ 運動的な玩具： 鳩車、竹馬など
- ⑥ 勝負や遊戯の玩具： おはじき、お手玉、独楽、お面、木刀、弓矢、豆鉄砲、紙鉄砲など
- ⑦ 仕掛け人形： 起き上がり小法師、弥次郎兵衛、相撲人形、手車（ヨーヨー）など

このようにすでに江戸時代においては、たくさんの玩具が作られていて、それをを用いた遊びが行われていたが、これらのうち乳幼児に関するものはどのようなものがあつたのであろうか。音の出る玩具であるがらがらや豆太鼓は現在でも乳児に対してよく用いられているのでわかるが、それ以外の玩具はどのような年齢の子どもたちに用いられたのであろうか。

わが国最初の体系的育児書といわれている香月牛山の「小児必用養育草」には、男児は5、6歳のころに殿事、馬事、竹馬などをし、女児は2、3歳より炊事をすると述べられているという¹²⁾。また同じころに出された貝原益軒の「和俗童子訓」にも「小児の時、紙鳶をあげ、破魔弓を射、狛をまわし、毬打の玉をうち、てまりをつき、端午に旗人形を立つる、女児の羽子をつき、あまがつ（人形）をいただき、雛をもてあそぶの類は、ただ幼き時、好めるはかなき戯れにて、年ようやく長じて後は、必ずすたるものなれば、心術において害なし。おおよび、その好みまかすべし。——小児の遊びを好むは、つねの情なり。道に害なきわざなれば、あながちに圧えかがめて、その気を屈せしむべからず。」と述べられている¹²⁾。こうした記述をみると、江戸時代の幼児たちの主な遊びは、男の子はお面や刀、弓矢などをを用いた殿様ごっこや、凧上げ・独楽回し、竹馬といった運動的な遊びが多かったようである。これに対して女の子は、ままごとや人形遊びといったごっこ遊びや、まりつきや羽根つきといった運動的な遊びがおおかったようである。幼児の遊びのこうした傾向は、現在の幼児の遊びとも通ずるものがあるように思われる。

まとめ

江戸時代の子育てを、その発達観と子育ての方法という視点から検討してみた。その結果、江戸時代における乳幼児の発達のなとらえ方は主に生育儀礼として成立し伝えられており、そのとらえ方の内容は現在の発達のな見方とほぼ一致していることがわかった。またこうした生育儀礼を通して擬制的親子関係を形成していったが、それは地域の人々との相互的な保護関係を形成することでもあった。さらに江戸時代においては、乳幼児期に死亡することも多く、こうした実情から7歳まではまだ神のもとにある存在として子どもを認識する見方が一般的であった。そのことが乳幼児をのびのびと自由に育てる風潮を生みだしていた。

江戸時代において子育ては母親や家族によってなされることが多かったが、武家や裕福な商家では乳母によって育てられることも多かった。また商家や裕福な農家では10歳頃の女児を子守として雇っていることも多かった。こうした乳母の資質に関しては儒教的な見方からの資質が求められていたが、その実態は必ずしもそれに応えるものではなかったようである。

子育ての方法としては、すでに胎教が知られており、お産は産屋でなされることが多かった。乳児期には籠に入れられて育てられることが多く、その後は子守によっておんぶされることが多かった。また7歳で寺子屋に入るまでは、地域の広場で現在の幼児とも共通するいろいろな玩具を用いた遊びをしてすごしていたようである。

文献

注1)『諸国風俗問状答』は、文化12～13年頃に当時の幕府祐筆であった屋代弘賢(1758～1841)が中心になって、全国大小各藩の儒者等に宛てて、生活慣行をアンケート調査したものである。『日本庶民生活史料集成・第9巻』所収 三一書房 1969

注2)『真澄遊覧記』は、直江の『日本子ども史』第3巻によると、宝暦4年(1754)三河国渥美群生まれの菅江真澄が30歳、天明3年(1783)からおおよそ30年余り、主に東北地方を巡遊の度にて、その際に各地の生活や伝承等を記録したものである。内田武志、宮本常一編『菅江真澄全集』未来社 1971～

注3)『全国民事慣例集』は、明治初年に政府が民法を編纂することを目的として、各地に向き当時の慣行を調査してまとめたものである。風早八十二解題「全国民事慣例類集」日本評論社 1944

注4) 恩賜財団母子愛育会編「日本産育習俗資料集成」第一法規 1975

注5) 石川松太郎、直江廣治 「日本子どもの歴史」3巻 第一法規 1977

注6) 大藤ゆき 「子どもの民族学」 草土文化 1982

注7) 鎌田久子 他 「日本人の子産み・子育て」 勁草書房 1990

注8) 宮田登「日本の伝統的子ども観」(岩田慶治編「子ども文化の原像」日本放送出版協会)

注9) 今野伸雄 「江戸の子育て事情」 築地書館 1988

注10) 山住正己、中江和恵編注 「子育ての書1」 東洋文庫 1976

注11) 小野武雄編 「江戸の遊戯風俗図誌」 展望社 1983

注12) 永田桂子著 「絵本観・玩具観の変遷」 高文堂 1987